梶谷正光君を偲ぶ

長澤惟恭

1

畏友梶谷正光君が逝かれてから，既に半年が過ぎた。寂寥の感ひとしおである。

梶谷君は，長州毛利藩の由緒正しい家柄の出自であり，教養の高い躾の厳しい家庭に成人された。小学生の頃から，祖母君による『論語』の素読を受けていたという。いかにもそれと首肯される姿勢の正しい，態度の毅然とした人であった。

郷里山口県の柳井中学を終えて東京商科大学予科に進み，同学本科在学中に学徒動員により南方に出征，中隊長として戦闘の第一線に立ち，敗戦後帰還と同時に復学，昭和21年９月に同大学を卒業された。

卒業年次では私の方が小し早いが，私にとっては，ほぼ45年以上の交友を通じて，殆んどすべての場合，美学を共通にすることの出来た得難い心友であった。しかし今更めて数え立ててみれば，彼と会った回数はあまり多くはない。

敗戦直後，彼が佐賀県渉外委員会で行政関係の通訳，翻訳に従事して佐賀市に在住，私が同県鹿島町に一家で疎解していた数年の間に，何度か訪問し合ったこと。その後彼が佐賀銀行に勤務中，出張等で上京の折，２，３度拙宅を訪ねて来てくれたこと。10年程前，彼の推輓で私が本学での講義を受持つようになってから，毎年数回の出講の度に――彼には公務出張中のことが良くあったが――昼食時などに学部長室で歓談したこと位いである。

2

梶谷君は学生時代，恩師故米谷隆三博士の許で，ルナールの「制度観」を通じて，制度というものに眼を開かせて戴いたと語っていた。同門の友人の話で

は，彼は語学に優れ，博士の指導により会社約款の調査，研究を続け乍ら，当該関係の英独文献の翻訳に従事していたという。

佐賀市のお宅に訪ねた頃には，彼は同じ大学の先学である左右田喜一郎博士の『経済哲学の諸問題』や，杉村廣藏博士の『経済倫理の構造』等の諸著の勉強に，余暇の殆んど全部を割いていた。そしてやがて，深く新カント派の価値哲学の研究に進んで行かれた。

佐賀銀行での勤務は，前後20年位であったと思うが，その頃彼からは，多数の調査，研究論文の抜刷を，発表の都度送って戴いた。また上京の機会に拙宅を訪ねて来られた折などには，地方銀行業務の実情に照して金融理論上の通説に鋭い吟味を加えるなど，私は彼から多くを学ぶことが出来た。ある時彼は，九州経済学会で，銀行経営における支払準備としての現金の重要性を問題とし，アダム・スミスの「キャッシュ・アカウント」に論及した興味深い研究報告をされた。その原稿の写しを戴いて，私は眼から鱗の落ちる思いをした覚えがある。

彼は管理，調査，人事等の職務を歴任し，後半の頃は，頭取秘書室長として深く同行の経営の中枢に関っていた。その頃の経験談は，後になっても良く話題になったが，地方銀行史あるいは銀行経営の諸問題についての現場からの証言として，興味深いことが多かった。座談が巧みで話は非常に面白かったが，ただ彼には，話が自分の手柄に帰す筈のことに及びそうになると，素早くその部分を端折ってしまう僻があったので，全体の流れが分り難くなるようなことも良くあった。

3

この10年ほどの間の学校での彼との歓談は，政治経済の時論は別として，主として学部レベルの文科系の大学の在り方についての侃々諤々であった。彼の職務からすれば，学部運営上の日常的な苦労話もあったであろうが，話題がそのようなことに及ぶことは一度もなかった。

「吾々が日々接しているのは，十有五にして学に志したとは思えない現実の

生身の学生である。水を飲まないと嘆くだけでは済まされない。彼らに対しては，水を飲むということそのこと自体を，吾々は何としてでも教え込まなければならないのだ。」

「学部レベルの大学に要求されているのは，専ら彼らの人格形成のための知的教育であり，学問的に裏付けられた世界像の形成に必要な体系的知識を，彼らに供給することに尽きるとさえ極言できるであろう。」

「経済学，経営学，会計学，商学などの学科の多くは，今日では，代数や幾何の教科書と同様に，それぞれについての標準的な教科書を書くことが出来る時代になっているのだ。それらのすべては，学生の全人教育ににとって必須の，教養の為めの学科と考えられるべきではないか。」

「現場のプロとしての吾々には，例えばこれらの主要な課目のそれぞれの基本問題について，少くとも彼らに，適切なオリエンテーションを供しうる程度の学識の獲得に努める義務がある。」等々。

巧みなジョークをも交え乍ら語る彼の熱心な主張——彼がその実践に努力していたことを，私は学生諸君からの仄聞によって知っている——に対しては，大筋において私は悉く賛成である。

4

彼の含羞を帯びて説く正論と，それに対する自分の応答とを反芻しながら，私は心地良い知的興奮を覚えつつ帰路につくのが常であった。

しかし今にして思う。私には身辺の哀歓についても，彼と語り合いたかったと思うことが少なくない。彼もまたそうであっただろうか。45年に及ぶこの心友との交りは，ともかく形の上では，淡きこと水の如くであることが出来たであろう。しかしそれで，凡て善しとしうるであろうか。私は今，どうしてもこの疑念を払拭することが出来ないのである。

梶谷君　君のご冥福を祈る。

合掌

（本学教授）